

一般財団法人児童健全育成推進財団 令和3年度健全育成研究助成 研究報告

研究テーマ 「子どものことをこどもに聞く 子どもたちが語る児童館」

研究代表者

沖縄女子短期大学児童教育学科 教授 上原 健二

共同研究者

沖縄女子短期大学児童教育学科 非常勤講師 長若 道代

## 1. 研究目的

本学の児童厚生 2 級指導員資格の養成課程において、学生は子どもたちとの関わりを中心として、実習先で感じたことなどを実習指導の授業の中で報告している。振り返りのディスカッションやレポートなどからは生き活きと活動している児童館の様子が伝わり、児童館が子どもたちにとってなくてはならない存在だということが伝えられている。

そこで、子どもたちが児童館をはじめとした生活の場で感じていること(遊び・生活・仲間・社会とのつながりなど)について留め置き質問紙によるアンケート及び聞き取り等の方法で調査を行うことで、直接、子どもたちの声を拾い上げ、今後の児童館の在り方について考察することを主な研究目的とする。

この成果に基づき、養成校としての児童厚生員資格取得のための講義の在り方や児童館ガイドラインに基づく子どもの視点に立った事業計画等の作成への提案等も検討する。

## 2. 研究方法

### ① 調査対象:

沖縄県内の児童館・児童センター(以下、「児童館」とする)74 施設のうち調査協力に承諾を頂いた 39 施設の児童館を利用している小学1年生から高校3年生(中卒の場合、18 歳)までの児童。

調査協力を依頼する児童館を選定する上では、児童館を設置している市町村はすべて対象とすること、市町村の人口規模や運営主体等のバランスを考慮して依頼件数を検討することなどを配慮した。

### ② 調査方法:

調査協力の承諾が得られた児童館すべてを対象として、郵送及び留置による質問紙調査を実施した。(質問紙への回答については基本的には児童自身が記入するものとしつつ、必要に応じて児童館職員による聞き取りの上で質問紙に記入することも可とした。)また、そのうち児童館を利用する児童本人に対する聞き取り調査の協力が得られた児童館については、別途、訪問による聞き取り調査を実施した。訪問の際には、新型コロナウイルス感染症対策を徹底しつつ、沖縄県内の感染状況を踏まえて、調査方法などは個々の児童館の実態に即して判断した。

調査期間:2021 年 10 月 1 日～2022 年 3 月 19 日

質問紙の送付先:沖縄県内の児童館 39 施設

回収された児童からの回答数:1092 件

(事前に各児童館から回答が見込まれる児童数を確認した上で質問紙を配布したが、新型コロナウイルスの感染状況の影響により、依頼する質問紙の数が適宜変更された。児童による主体的なアンケート実施の観点から、回収された質問紙のうち調査対象から外れる者(幼稚園児 1 名、保護者 1 名)を除き、すべてを分析に使用した。)

アンケートの集計の際は、Excel 統計(ver.3.23)及び KH Coder(ver.3.Beta 03a)を使用した。

## 3. 倫理的配慮

研究対象者である児童の個人情報を守るために必要かつ適切な措置(研究参加者の匿名性の確保等)を講じること、研究目的以外には使用しないこと、回答は任意であること、研究参加者から情報・データの開示を求められた場合には、研究の範囲内においてこれを開示することなどについて書面で伝え、研究の主旨に協力する者に対して回答を求めた。

上記についてデータ管理をはじめ、適切に対応することを通して、倫理的配慮に留意した。

#### 4. 研究結果

##### (1) 単純集計

回答した児童について、学年及び性別ごとの回答者数は、以下の通り。

##### 1) 学年及び男女別の回答者数

	学年	件数	小計 (3学年単位で集計)	男子	女子	回答しない	未記入
小学生	小1	101	367	44	54	3	0
	小2	142		36	100	4	2
	小3	124		56	66	2	0
	小4	136	418	46	85	4	1
	小5	164		67	89	6	2
	小6	118		49	65	4	0
中学生	中1	75	177	35	35	5	0
	中2	53		19	29	4	1
	中3	49		27	16	6	0
高校生	高1	10	26	8	2	0	0
	高2	9		6	3	0	0
	高3	7		4	3	0	0
	※未記入	104	104	6	5	4	89
	合計	1092	1092	403	552	42	95

##### (2) 学年別の「Q1. 児童館に通っている理由」について

児童館を利用している児童について、学年別(①小学1～3年生、②小学4～6年生、③中高生)の3つに分けて、「Q1. 児童館に通っている理由」についてのクロス集計を行った。各設問の結果を以下に記す。

##### 1) 遊び場として利用するため

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合計
1.小学1～3年生	242 (68.0%)	66 (18.5%)	29 (8.1%)	19 (5.3%)	356 (100.0%)
2.小学4～6年生	301 (72.5%)	85 (20.5%)	14 (3.4%)	15 (3.6%)	415 (100.0%)
3.中高生	156 (78.4%)	33 (16.6%)	4 (2.0%)	6 (3.0%)	199 (100.0%)
合計	699 (72.1%)	184 (19.0%)	47 (4.8%)	40 (4.1%)	970 (100.0%)

\*\*p<0.01

どの学年の児童も多くが児童館を利用する上で「遊び場として利用する」ことが回答から確認できる。それについては本来の目的として当然のことと考えられるが、逆に「あてはまらない」と回答する児童については、その他の理由として自由記述で「保護者の仕事」「お迎えを待っている」「待ち合わせ場所」「学童保育」「暇なとき」といった回答のように遊び場の活用が主な目的ではない利用状況も複数確認できた。また、「ダンスをするため」というように遊び以外の目的に沿って利用する様子も見受けられた。

2) 友だちと交流(遊び・おしゃべりなど)するため

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
1.小学1～3年生	220 (62.7%)	63 (17.9%)	35 (10.0%)	33 (9.4%)	351 (100.0%)
2.小学4～6年生	244 (59.4%)	99 (24.1%)	37 (9.0%)	31 (7.5%)	411 (100.0%)
3.中高生	134 (67.7%)	45 (22.7%)	9 (4.5%)	10 (5.1%)	198 (100.0%)
合 計	598 (62.3%)	207 (21.6%)	81 (8.4%)	74 (7.7%)	960 (100.0%)

\*p<0.05

2)と同様、多くの児童が友だち同士の交流を目的として児童館を利用していることが確認できる。

3) クラブ活動をするため

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
1.小学1～3年生	47 (14.3%)	17 (5.2%)	23 (7.0%)	241 (73.5%)	328 (100.0%)
2.小学4～6年生	66 (16.5%)	45 (11.3%)	43 (10.8%)	246 (61.5%)	400 (100.0%)
3.中高生	18 (9.2%)	18 (9.2%)	28 (14.4%)	131 (67.2%)	195 (100.0%)
合 計	131 (14.2%)	80 (8.7%)	94 (10.2%)	618 (67.0%)	923 (100.0%)

\*\*p<0.01

クラブ活動が行われていない児童館もあったことから、「まったくあてはまらない」と回答する児童の割合が多い結果となった。「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」との回答は「小学4～6年生」が多い結果となった。

4) 行事・イベントに参加するため

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
1.小学1～3年生	132 (39.5%)	70 (21.0%)	50 (15.0%)	82 (24.6%)	334 (100.0%)
2.小学4～6年生	92 (22.9%)	101 (25.1%)	81 (20.1%)	128 (31.8%)	402 (100.0%)
3.中高生	39 (20.2%)	43 (22.3%)	37 (19.2%)	74 (38.3%)	193 (100.0%)
合 計	263 (28.3%)	214 (23.0%)	168 (18.1%)	284 (30.6%)	929 (100.0%)

\*\*p<0.01

他の設問に比べると、比較的均等に分かれて回答されており、行事やイベントへの参加を目的の1つとして意識して来館する児童とそれにとらわれずに利用する児童がいることが確認できる。それぞれの行事やイベントの内容によって回答が変わる可能性があるが、それについては確認できない。

5) 先生と交流(遊び・おしゃべりなど)するため

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
1.小学1～3年生	114 (33.5%)	85 (25.0%)	60 (17.6%)	81 (23.8%)	340 (100.0%)
2.小学4～6年生	94 (23.3%)	108 (26.7%)	83 (20.5%)	119 (29.5%)	404 (100.0%)
3.中高生	71 (36.2%)	50 (25.5%)	31 (15.8%)	44 (22.4%)	196 (100.0%)
合 計	279 (29.7%)	243 (25.9%)	174 (18.5%)	244 (26.0%)	940 (100.0%)

\*p<0.05

この設問の回答によると、児童館職員との交流を目的とする児童とそうではない児童がそれぞれ確認できるが、「中高生」や「小学1～3年生」に比べると「小学4～6年生」割合が若干低い傾向が垣間見える。

6) 食事をするため

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
1.小学1～3年生	36 (10.7%)	28 (8.3%)	27 (8.0%)	245 (72.9%)	336 (100.0%)
2.小学4～6年生	28 (7.0%)	32 (8.0%)	50 (12.4%)	292 (72.6%)	402 (100.0%)
3.中高生	16 (8.2%)	22 (11.2%)	23 (11.7%)	135 (68.9%)	196 (100.0%)
合 計	80 (8.6%)	82 (8.8%)	100 (10.7%)	672 (71.9%)	934 (100.0%)

児童館によっては子ども食堂など食事支援に取り組むところがある一方、多くの児童館が食べ物の持ち込みを禁止することが多かったことから、上記の結果となった。

7) 勉強をするため

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
1.小学1～3年生	109 (32.5%)	49 (14.6%)	48 (14.3%)	129 (38.5%)	335 (100.0%)
2.小学4～6年生	73 (18.0%)	83 (20.4%)	66 (16.3%)	184 (45.3%)	406 (100.0%)
3.中高生	41 (20.7%)	38 (19.2%)	30 (15.2%)	89 (44.9%)	198 (100.0%)
合 計	223 (23.7%)	170 (18.1%)	144 (15.3%)	402 (42.8%)	939 (100.0%)

\*\*p<0.01

いずれの学年も「まったくあてはまらない」と回答する割合が多かったが、「小学1～3年生」では他の学年に比べて勉強をする割合が多く見られ、帰宅前に児童館で宿題を済ませる様子も見受けられた。自由記述では「友だちと宿題をする」ことが挙げられる回答も見受けられたが、「塾や習い事の時間まで間に遊び場として児童館を利用する」といった回答もあり、やはり児童館を遊びやくつろぐ(休む)場として過ごす様子も確認できる。

8) その他に行く(過ごせる)場所がないため

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
1.小学1～3年生	105 (31.8%)	48 (14.5%)	45 (13.6%)	132 (40.0%)	330 (100.0%)
2.小学4～6年生	63 (15.8%)	66 (16.5%)	57 (14.3%)	213 (53.4%)	399 (100.0%)
3.中高生	34 (17.5%)	45 (23.2%)	31 (16.0%)	84 (43.3%)	194 (100.0%)
合 計	202 (21.9%)	159 (17.2%)	133 (14.4%)	429 (46.5%)	923 (100.0%)

\*\*p<0.01

いずれの学年も「まったくあてはまらない」と回答する割合が半数近く、児童にとって過ごせる場所が選択できる環境が保障されている様子が確認できる。ただし、「小学1～3年生」では他の学年に比べて「とてもあてはまる」と回答する割合が多く、低学年の帰宅前の居場所として活用される様子が見受けられる。

(3) 学年別の「Q4. 児童館に来ていないときの過ごす場所」について

児童館を利用している児童について、学年別(①小学1～3年生、②小学4～6年生、③中高生)の3つに分けて、「Q4. 児童館に来ていないときの過ごす場所」についてのクロス集計を行った。各設問の結果を以下に記す。

1) 自分の家で過ごす

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
1.小学1～3年生	231 (66.4%)	48 (13.8%)	29 (8.3%)	40 (11.5%)	348 (100.0%)
2.小学4～6年生	270 (66.0%)	75 (18.3%)	34 (8.3%)	30 (7.3%)	409 (100.0%)
3.中高生	124 (62.6%)	42 (21.2%)	18 (9.1%)	14 (7.1%)	198 (100.0%)
合 計	625 (65.4%)	165 (17.3%)	81 (8.5%)	84 (8.8%)	955 (100.0%)

いずれの学年も児童館に来ていない時は自宅で過ごす割合が多いことが確認できた。ただし、割合は少ないが一定数が下校後の帰宅が困難な児童がいることも確認された。

2) 学校で過ごす

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
1.小学1～3年生	38 (11.6%)	34 (10.4%)	30 (9.2%)	225 (68.8%)	327 (100.0%)
2.小学4～6年生	70 (17.7%)	49 (12.4%)	71 (18.0%)	205 (51.9%)	395 (100.0%)
3.中高生	66 (34.4%)	28 (14.6%)	41 (21.4%)	57 (29.7%)	192 (100.0%)
合 計	174 (19.0%)	111 (12.1%)	142 (15.5%)	487 (53.3%)	914 (100.0%)

\*\*p<0.01

中高生に比べて小学生は「まったくあてはまらない」の割合がいずれの学年も高く、下校後は速やかに学校以外の場へ移動することが確認できる。中高生は「とてもあてはまる」の割合が小学生よりも多い。児童館の利用状況が中高生ではそもそも少なくなることから、児童館が学校を含めて放課後を過ごす選択肢の1つとして位置づけられているものと考えられる。

### 3) 友だちの家で過ごす

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
1.小学1～3年生	28 (8.5%)	40 (12.1%)	42 (12.7%)	221 (66.8%)	331 (100.0%)
2.小学4～6年生	30 (7.6%)	59 (14.9%)	76 (19.2%)	231 (58.3%)	396 (100.0%)
3.中高生	37 (19.5%)	39 (20.5%)	35 (18.4%)	79 (41.6%)	190 (100.0%)
合 計	95 (10.4%)	138 (15.0%)	153 (16.7%)	531 (57.9%)	917 (100.0%)

\*\*p<0.01

いずれの学年でも友だちの家で過ごす割合が低く、児童館や学校、近隣など、公共の場で過ごすことが多く、児童がプライベート空間としての互いの自宅を行き来することが少ない様子が見受けられる。

### 4) 親戚(祖父母など)の家で過ごす

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
1.小学1～3年生	70 (21.2%)	47 (14.2%)	33 (10.0%)	180 (54.5%)	330 (100.0%)
2.小学4～6年生	51 (12.8%)	46 (11.6%)	52 (13.1%)	248 (62.5%)	397 (100.0%)
3.中高生	22 (11.5%)	21 (10.9%)	37 (19.3%)	112 (58.3%)	192 (100.0%)
合 計	143 (15.6%)	114 (12.4%)	122 (13.3%)	540 (58.8%)	919 (100.0%)

\*\*p<0.01

いずれの学年も半数以上が「まったくあてはまらない」と回答しているが、「とてもあてはまる」の割合は「小学1～3年生」は他の学年よりも多く、低学年の児童にとっては受入れ場所として機能する様子が見受けられる。核家族化など、近隣に親類が居住していないことも背景として考えられる。

### 5) 学童保育(学童クラブ)に通う

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
1.小学1～3年生	44 (13.8%)	11 (3.4%)	9 (2.8%)	255 (79.9%)	319 (100.0%)
2.小学4～6年生	19 (4.9%)	7 (1.8%)	5 (1.3%)	360 (92.1%)	391 (100.0%)
合 計	63 (8.9%)	18 (2.5%)	14 (2.0%)	615 (86.6%)	710 (100.0%)

\*\*p<0.01

小学校高学年では学童保育を利用する児童が少ないことも背景にあつて、「小学1～3年生」に比べて「小学4～6年」が学童保育を利用する割合が際立って少ない。低学年の「小学1～3年生」の割合も8割近くが「まったくあてはまらない」となっており、全国に比べて沖縄県内の学童保育の利用率の低さが反映された結果と考えられる。ただし、児童館内の学童保育を利用する児童の回答が反映されていない可能性もあり、今後の研究の課題となる。

#### 6) 塾・習い事・部活に通う

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合計
1.小学1～3年生	105 (32.6%)	29 (9.0%)	17 (5.3%)	171 (53.1%)	322 (100.0%)
2.小学4～6年生	140 (35.3%)	52 (13.1%)	33 (8.3%)	172 (43.3%)	397 (100.0%)
3.中高生	70 (36.1%)	43 (22.2%)	19 (9.8%)	62 (32.0%)	194 (100.0%)
合計	315 (34.5%)	124 (13.6%)	69 (7.6%)	405 (44.4%)	913 (100.0%)

\*\*p<0.01

いずれの学年も「とてもあてはまる」と「まったくあてはまらない」の割合が多く、塾・習い事や部活で過ごしている児童の二極化が見受けられる。自由記述などによると塾や習い事が開始時間までの時間帯で児童館を利用する場合もあり、子どもなりに忙しい時間のやりくりとして児童館を利用している回答もあった。

#### 7) 児童館以外の地域(近所)で過ごす

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合計
1.小学1～3年生	55 (16.7%)	33 (10.0%)	32 (9.7%)	209 (63.5%)	329 (100.0%)
2.小学4～6年生	72 (18.0%)	41 (10.3%)	35 (8.8%)	251 (62.9%)	399 (100.0%)
3.中高生	42 (21.8%)	25 (13.0%)	33 (17.1%)	93 (48.2%)	193 (100.0%)
合計	169 (18.3%)	99 (10.7%)	100 (10.9%)	553 (60.0%)	921 (100.0%)

\*\*p<0.01

児童が過ごしている地域の近隣の環境に左右されるものと考えられるが、いずれの学年でも「まったくあてはまらない」の回答が多くを占められている。他の設問で挙げられた環境が整っていることで、それ以外の場を特に必要としない場合もあれば、近隣に上記以外の環境が保障されていない場合も考えられる。「児童館以外の地域(近所)」が具体的にどのような場を指すのかによっても捉え方は多様であり、公民館、児童館以外の近隣の公園、ショッピングモール、その他、地域性によって様々な環境が想定できる。

(4) 男女別の「Q1. 児童館に通っている理由」について

児童館を利用している児童について、男女別に分けて、「Q1. 児童館に通っている理由」についてのクロス集計を行った。各設問の結果を以下に記す。(※有意差のあるもののみ)

1) 行事・イベントに参加するため

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
男子	108 (28.5%)	70 (18.5%)	67 (17.7%)	134 (35.4%)	379 (100.0%)
女子	151 (29.2%)	138 (26.6%)	94 (18.1%)	135 (26.1%)	518 (100.0%)
合 計	259 (28.9%)	208 (23.2%)	161 (17.9%)	269 (30.0%)	897 (100.0%)

\*\*p<0.01

女子に比べて男子は「まったくあてはまらない」と回答した割合が高く、逆に女子は「まあまああてはまる」と回答した割合が高い。日常的に児童館を利用する児童がいるなかで、女子に比べて男子の方は行事やイベントの有無にかかわらず利用する傾向が強いことが伺える。

2) 先生と交流(遊び・おしゃべりなど)するため

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
男子	95 (24.6%)	104 (26.9%)	71 (18.4%)	116 (30.1%)	386 (100.0%)
女子	179 (34.2%)	131 (25.0%)	101 (19.3%)	112 (21.4%)	523 (100.0%)
合 計	274 (30.1%)	235 (25.9%)	172 (18.9%)	228 (25.1%)	909 (100.0%)

\*\*p<0.01

男子に比べて女子は「とてもあてはまる」と回答した割合が高く、逆に男子は「まったくあてはまらない」と回答した割合が高い。女子児童の職員との交流の程度が高いことについては、職員構成の男女比として女子職員の割合の高さが考えられること、遊びや児童館での過ごし方に違いがあるものと考えられる。

### 3) 勉強をするため

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
男子	77 (20.0%)	55 (14.3%)	74 (19.2%)	179 (46.5%)	385 (100.0%)
女子	139 (26.6%)	107 (20.5%)	68 (13.0%)	209 (40.0%)	523 (100.0%)
合 計	216 (23.8%)	162 (17.8%)	142 (15.6%)	388 (42.7%)	908 (100.0%)

\*\*p<0.01

男女ともに「まったくあてはまらない」が4割以上を占めてはいるものの、男子に比べて女子は「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」のいずれの回答も割合が高く、逆に男子は「まったくあてはまらない」「あまりあてはまらない」と回答した割合が高い。「5)先生と交流(遊び・おしゃべりなど)するため」と共通するのは、いずれも比較的活動的というよりは落ち着いた過ごし方であることも男女差として表れた結果とも考えられる。

(5) 男女別の「Q4. 児童館に来ていないときの過ごす場所」について

児童館を利用している児童について、男女別に分けて、「Q4. 児童館に来ていないときの過ごす場所」についてのクロス集計を行った。各設問の結果を以下に記す。(※有意差のあるもののみ)

1) 友だちの家で過ごす

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
男子	55 (14.7%)	63 (16.8%)	65 (17.4%)	191 (51.1%)	374 (100.0%)
女子	42 (8.2%)	73 (14.2%)	80 (15.6%)	318 (62.0%)	513 (100.0%)
合 計	97 (10.9%)	136 (15.3%)	145 (16.3%)	509 (57.4%)	887 (100.0%)

\*\*p<0.01

男女ともに「まったくあてはまらない」と回答した割合が5～6割を占めており、決して大きい数値ではないが、「とてもあてはまる」「まあまああてはまる」ともに女子より男子の割合がわずかではあるが多いことが確認された。

2) 学童保育(学童クラブ)に通う

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
男子	31 (11.7%)	8 (3.0%)	11 (4.1%)	216 (81.2%)	266 (100.0%)
女子	35 (8.2%)	10 (2.3%)	4 (0.9%)	377 (88.5%)	426 (100.0%)
合 計	66 (9.5%)	18 (2.6%)	15 (2.2%)	593 (85.7%)	692 (100.0%)

\*p<0.05

内訳としての学年の違いが確認できないので詳細な考察には限界はあるが、学童保育を利用していない児童が児童館を来館する割合については、女子よりも男子の方が若干多い傾向にあるものと考えられる。

3) 児童館以外の地域(近所)で過ごす

	4.とてもあてはまる	3.まあまああてはまる	2.あまりあてはまらない	1.まったくあてはまらない	合 計
男子	81 (21.7%)	50 (13.4%)	42 (11.2%)	201 (53.7%)	374 (100.0%)
女子	84 (16.3%)	46 (8.9%)	54 (10.5%)	331 (64.3%)	515 (100.0%)
合 計	165 (18.6%)	96 (10.8%)	96 (10.8%)	532 (59.8%)	889 (100.0%)

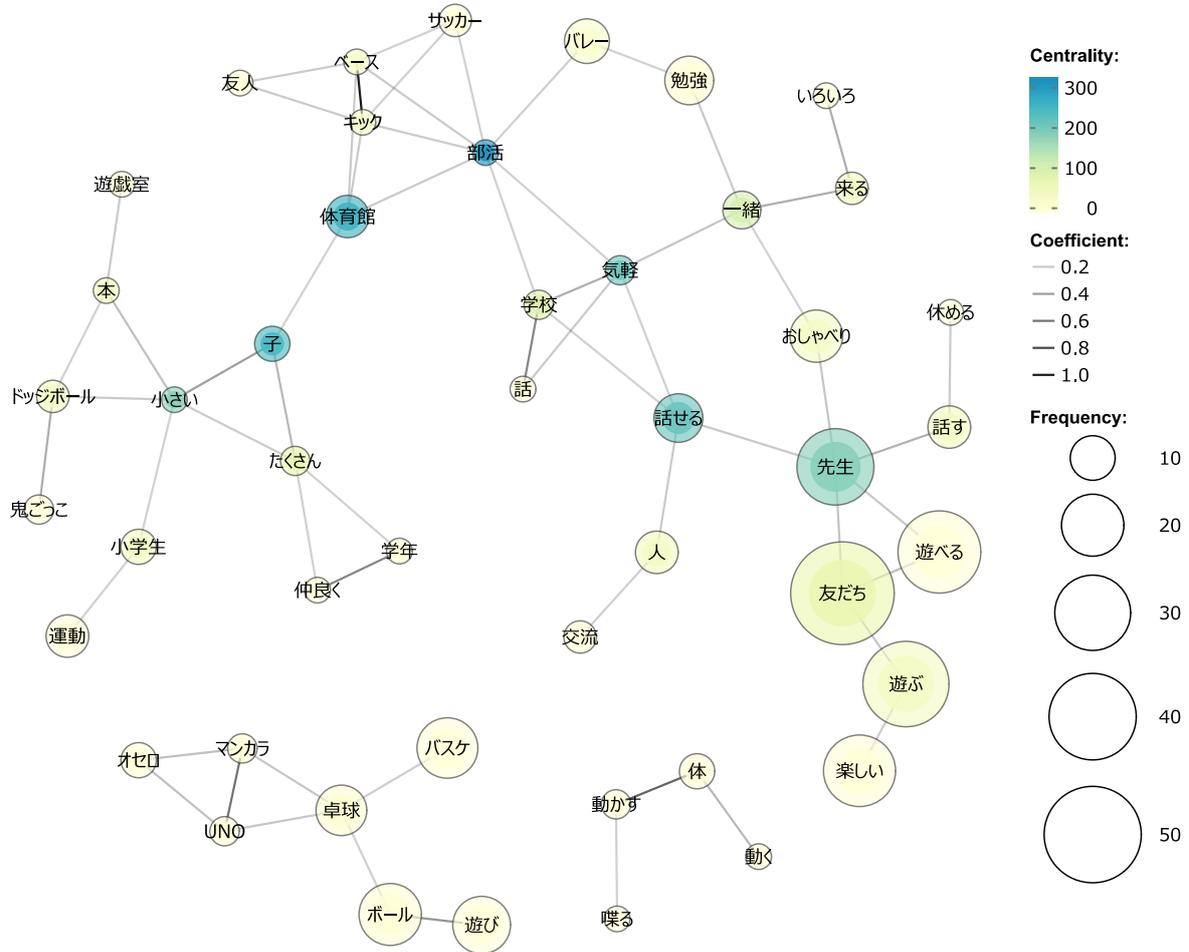
\*\*p<0.01





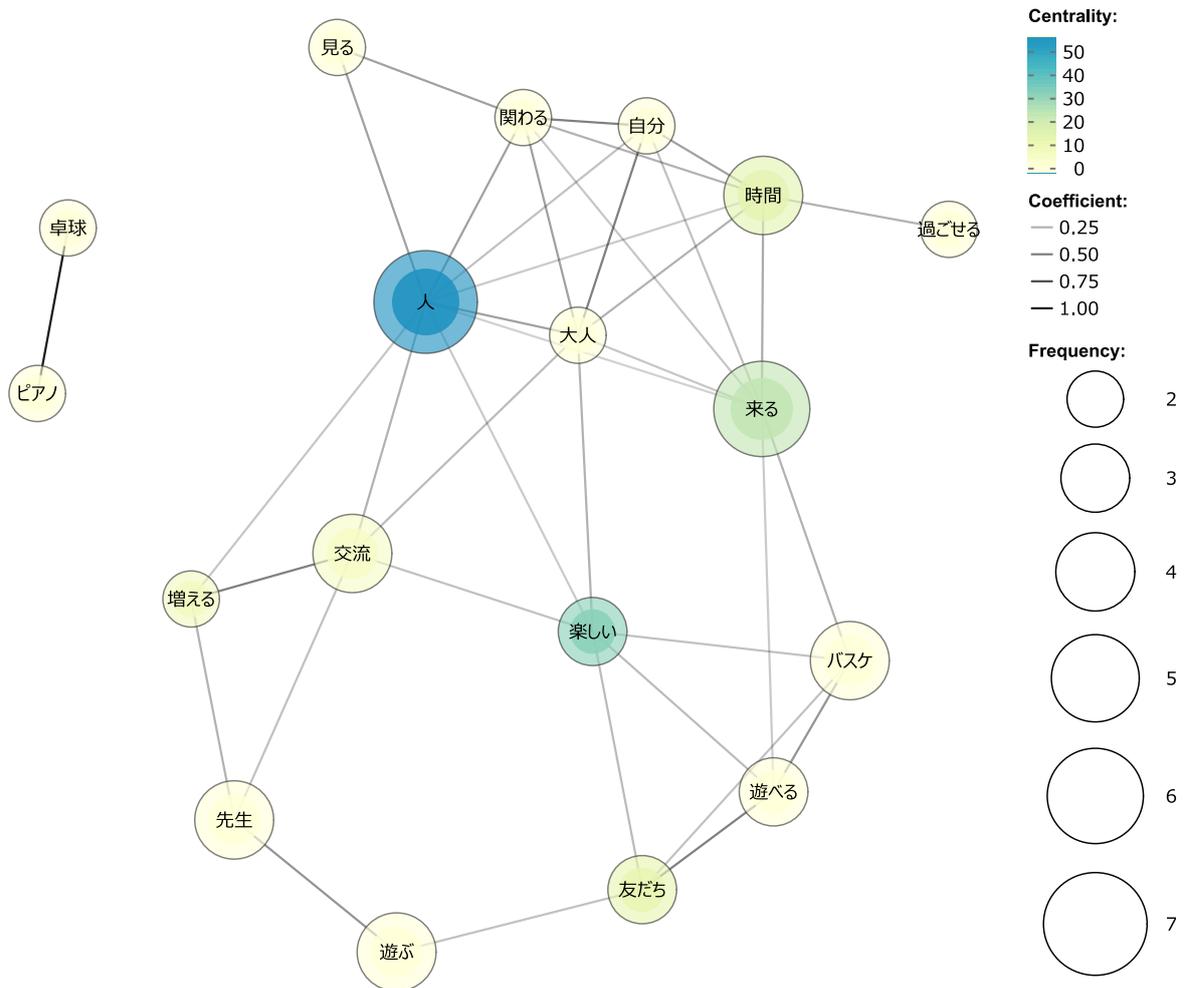


4) 「男子・女子」とともに「中学1～3年生」を対象とした共起ネットワーク図



中学生では「先生」は文脈的に中心的な位置づけとなっているが、小学生で隣接して記されていた「遊ぶ」と異なり、「話せる」「気軽に」という語句が続けて文脈において中心的な位置づけとなっている。成長とともに、話し相手としての存在価値が高まると見受けられる。

5)「男子・女子」ともに「高校1～3年生」を対象とした共起ネットワーク図

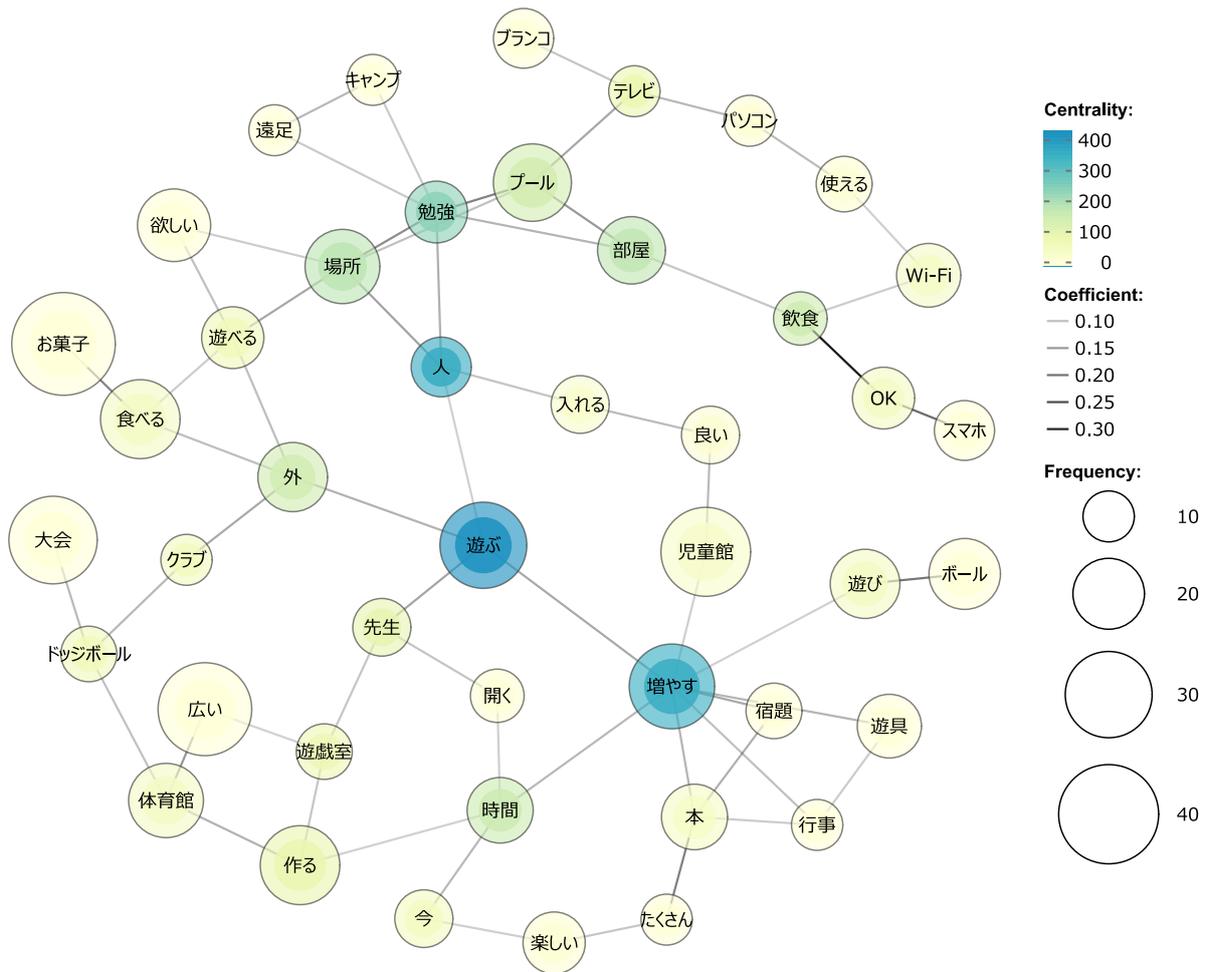


高校生ではサンプル数が少なくなるが、頻出しつつも中心的な役割を果たす語句として「人」が登場する。隣接する語句として「大人」「交流」「増える」「関わる」「時間」「過ごす」といったように、中学生以前の「遊び」を中心とした関わりから、小中学生といった年少者とともに過ごす環境のなかで大人に近づき、対等に近づきつつある関係性が垣間見える。また、具体的な遊びを表す語句の登場が少ないことも特徴的である。

(7)「児童館に希望・要望したいこと」についての共起ネットワーク分析

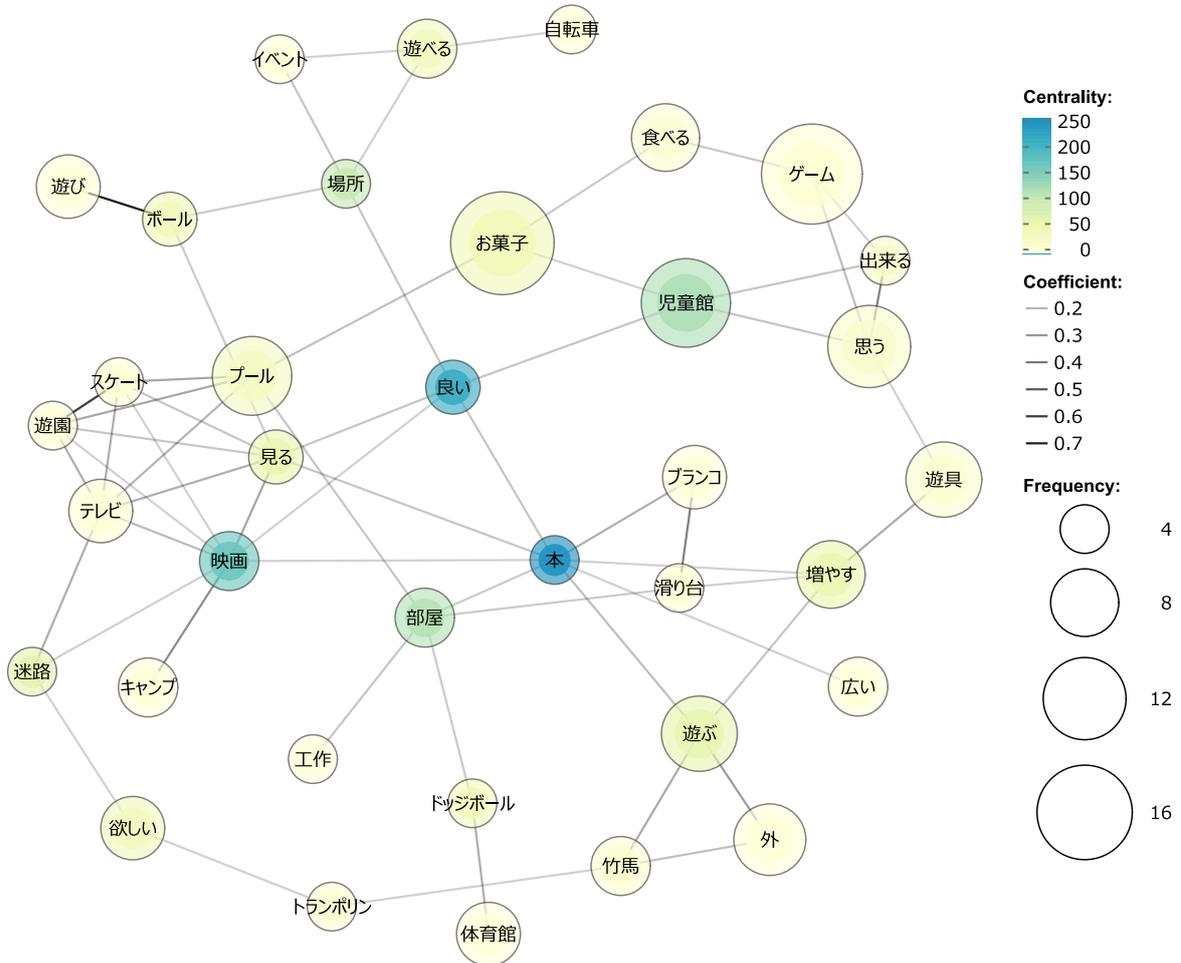
「児童館に希望・要望したいこと」について自由記述により得られた回答に対して、テキストマイニングを用いた共起ネットワーク分析を行った。下記の図の円の大きさは頻出した語句の数を指し、語句の前後の隣接する位置関係が線で結ばれている。より関係性の強い語句が近い位置に記されており、分析対象の文章のなかで中心的な役割を示す語句については青い色で示されている。

1)「男子・女子」ともに「全学年」を対象とした共起ネットワーク図



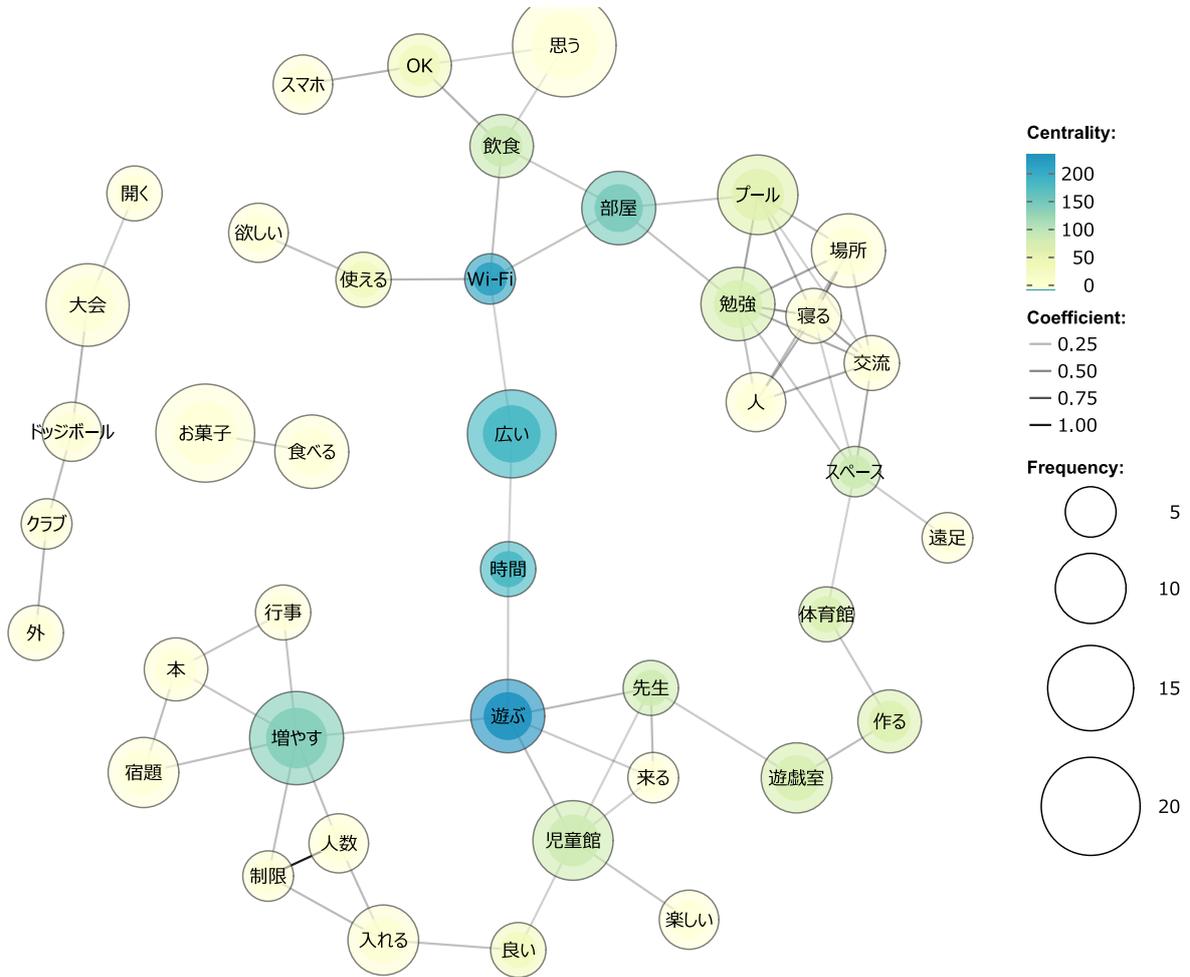
「遊ぶ」とともに中心的な役割に位置づけられている「増やす」については、「時間」「本」「児童館」が続いており、開館時間や設備面の充実を期待する様子が見えてくる。「遊ぶ」につながる語句として「人」「先生」「外」があり、その先には様々な環境での過ごし方が提示されている。

2) 「男子・女子」ともに「小学1～3年生」を対象とした共起ネットワーク図



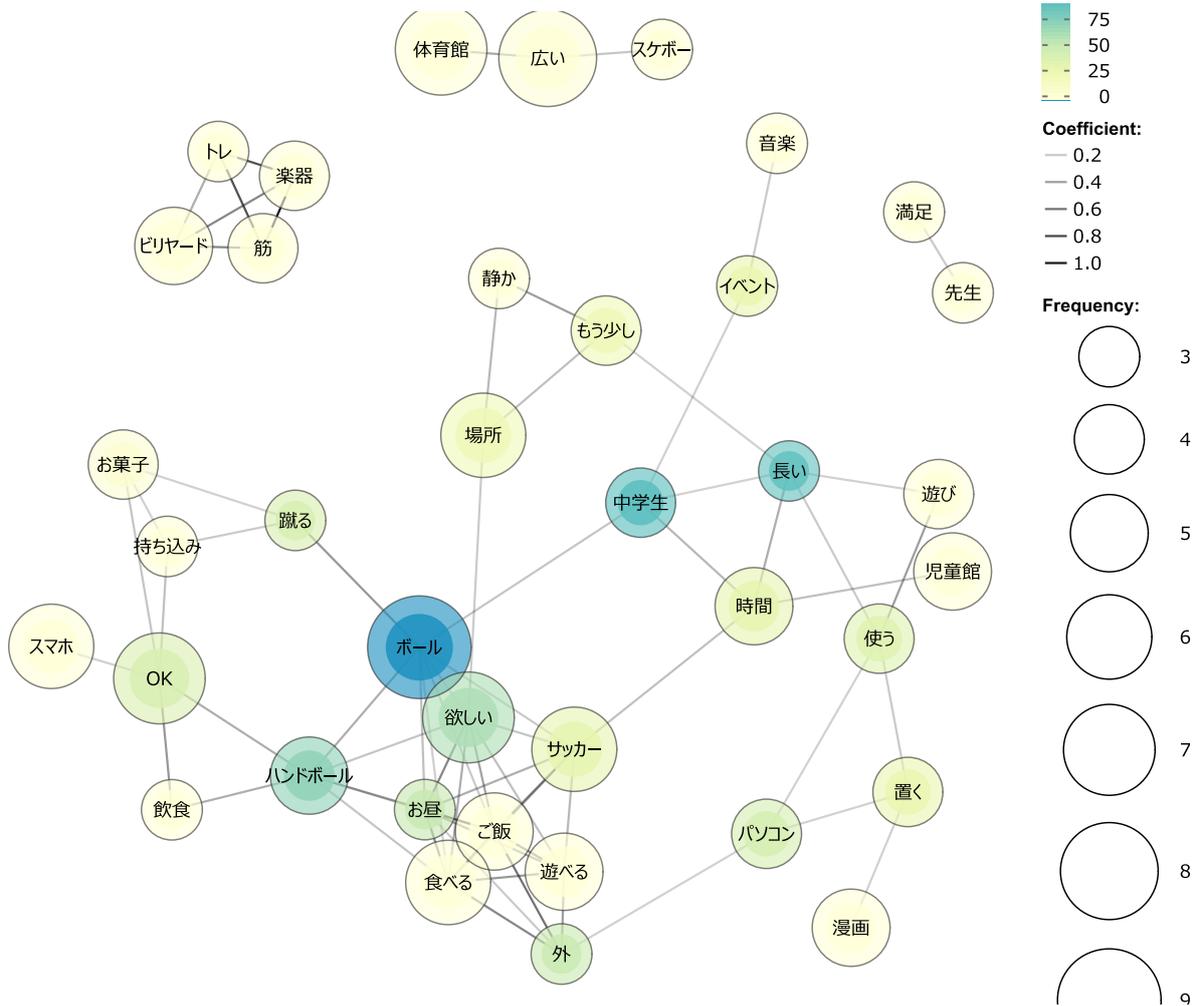
「お菓子」「ゲーム」「児童館」の頻出度が高いところ、中心的な位置づけとなる語句として「本」「良い」「映画」が登場するが、その先には「キャンプ」や「プール」「スケート」「迷路」など、非日常的なイベントなども登場することから、特にコロナ禍におけるイベント自粛の影響を受けた希望・要望であるものと推察される。周辺に挙がる遊びの種類は低学年が多く経験するものが表示されている。

3)「男子・女子」とともに「小学4～6年生」を対象とした共起ネットワーク図



中心的な位置づけとされる「遊ぶ」から「増やす」へ、また「時間」「広い」など、高学年になって低学年に比べて広い空間や時間が確保された環境で活発に活動することを希望している様子が見られる。それとともに、「Wi-fi」「部屋」「飲食」からは自宅での過ごし方と似ている環境を児童館にも求める様子が見受けられ、単に遊ぶことだけでなく“居場所”として児童館を活用することが見受けられる。

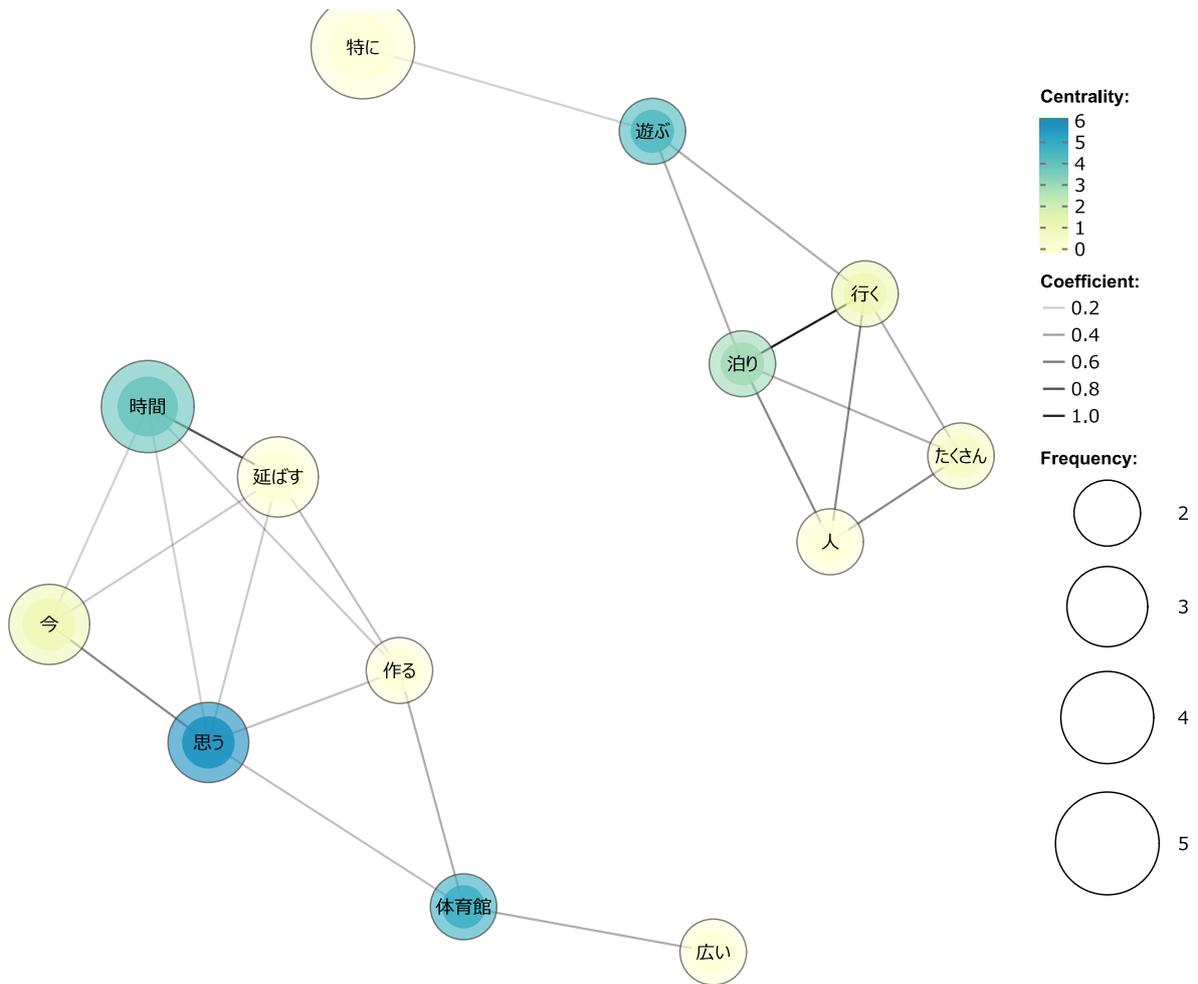
4) 「男子・女子」ともに「中学1～3年生」を対象とした共起ネットワーク図



「ボール」が頻出しつつ中心的な位置づけとなることから、中学生が遊ぶ傾向として球技が注目される様子が伺える。続く「中学生」からは、小学生とは区別した中学生同士のかかわりを「長い」「時間」を過ごしたいという意図が垣間見える。また、小学生には見られなかった「ご飯」「食べる」からは、一部の児童館で取り組まれる夜間開放及び食事支援の背景が想定できる。また、「もう少し」「静か」な「場所」を求めるように、単に遊びを目的とした利用ではなく、安心して過ごすことができる場としての児童館に期待を寄せる様子も推察できる。

また、独立した語句の群として「楽器」「ビリヤード」「筋トレ」「スケボー」など、思春期以降ならではの関心事も挙げられることも特徴的である。

5) 「男子・女子」ともに「高校1～3年生」を対象とした共起ネットワーク図



高校生になると、具体的な遊びを表す語句は消え、「いかにして過ごしたいか」といった点で表現されている様子が見受けられる。「時間」を「延ばす」、「体育館」を「広く(してほしい)や「泊まり」に「行きたいといったような要望をしつつも、「今」の語句が記述されている前後の文脈には「のままで良い」が多く記されるなど、現状として満足している記述も多く見られる。

(8) アンケート調査及び聞き取り調査からの個別の意見について

上記(6)(7)のテキストマイニングを用いた共起ネットワーク分析では、頻出する語句や文脈における中心的な役割に応じて主に取り上げられることから、個別的で具体的な意見は省略されることが多い。従って、ここでは、アンケート調査及び聞き取り調査で特徴的だったコメントについてカテゴリーに分類して紹介する。

①「児童館に来て楽しいこと」

分類	具体的な意見等
「遊び」を通じた過ごし方(同学年、異年齢)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達と遊べる</li> <li>・大きい子や小さい子とも遊べる</li> <li>・他の学校の子とも遊べる</li> </ul>
児童館職員の存在・関係性・役割	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生と一緒に遊んでくれる</li> <li>・先生とため口で話せる</li> <li>・相談できる大人がいる</li> <li>・ほめたり、怒ってくれる先生がいる</li> <li>・自分たちの意見を聞いてくれる</li> </ul>
児童館に足を運びやすさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ストレスがない</li> <li>・自由に行ける</li> <li>・ふらっと行ける</li> <li>・指示命令がない</li> <li>・家や学校から近い</li> </ul>
児童館ならではの楽しさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しめる</li> <li>・自由に遊べる</li> <li>・行事が楽しい</li> </ul>
児童館の過ごしやすさ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ぼーっとできる・くつろげる</li> <li>・過ごしやすい</li> <li>・とても和やか</li> </ul>
遊びや居心地の良い環境整備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊び道具がたくさんある</li> <li>・本や漫画がたくさんある</li> <li>・ものづくりが楽しい</li> <li>・ピアノが弾ける</li> <li>・バスケができる</li> <li>・BGMがいい、流行りの曲で心地良い</li> </ul>
遊び以外の過ごし方の保障	<ul style="list-style-type: none"> <li>・宿題ができる</li> <li>・休憩できる</li> </ul>
食事を通じたかかわり、食事支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おやつを作ってくれる</li> <li>・子ども食堂がある</li> </ul>

②「児童館に希望・要望したいこと」

分類	具体的な意見等
現状に満足している	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特にない</li> <li>・今のままで良い</li> </ul>
開館時間の延長・確保	<ul style="list-style-type: none"> <li>・開館時間を長くしてほしい</li> <li>・土曜日や休みの日は朝9時から開けてほしい</li> <li>・中高生タイム(夜間開放)してほしい</li> </ul>
既存の設備の拡張・充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>・広い体育館がほしい</li> <li>・庭や運動場がほしい(広げてほしい)</li> <li>・天井を高くしてほしい</li> </ul>
新しい設備の追加	<ul style="list-style-type: none"> <li>・屋外にスケボーパークを作してほしい</li> <li>・大型シアターを作してほしい</li> </ul>
遊び道具(数量・内容)の追加	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊び道具を増やしてほしい</li> <li>・新しいおもちゃがほしい</li> <li>・ゲームやスマホ、パソコンができる部屋がほしい</li> <li>・Wi-fiを設置してほしい</li> </ul>
飲食のできる環境	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おやつのお店や飲食ができる場所がほしい</li> <li>・お菓子を持ち込みたい</li> </ul>
静かに過ごせる場所	<ul style="list-style-type: none"> <li>・静かに勉強できるスペースがほしい</li> <li>・眠れたりゴロゴロできる、くつろげる部屋がほしい</li> </ul>
行事やイベントの開催	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャンプやお泊まり会がしたい</li> <li>・海や山登山に行きたい</li> </ul>
児童館職員とのかかわり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生たちとまだ慣れていないから、慣れたら話してみたい</li> </ul>
子ども同士のかかわり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いじめがないこと(実際にはあるが、周りが助けてくれる)</li> </ul>

## 5. 考察

### 1) 年齢に相応しいかかわりのあり方

今回の調査結果によると、小学生から高校生に至るまで、各年代における児童館での遊びや過ごし方の特徴を踏まえつつも、ともに過ごす「友だち」や「先生」との関係の作り方に特徴的な面が見られた。

年代によって児童館での過ごし方にも違いが見られ、遊びそのものの広がりとともに、他者との関係作りについても「同学年の子ども同士」から「異年齢の子ども同士」さらには「(児童館職員をはじめとした)大人とのかかわり」というように、対人関係の持ち方に広がりが見られた。このことから、児童館職員にとっては、対象となる児童や場面に応じた関係作りにおける配慮や工夫が求められることが考えられる。「児童館ガイドライン」における「第2章 子ども理解」において、発達の個人差を踏まえた発達過程の理解が示されているが、専門職としては子ども個人の人々の背景による影響を考慮しつつも、年齢に応じてある程度求められる役割や関係性を通して、子ども自身が表す姿を踏まえた期待されるようなかかわり方が求められる。

### 2) 居場所としての児童館

「児童館に来ていないときの過ごす場所」の設問において、「学校で過ごす」との回答からは下校後速やかに学校以外の場所へ移動する様子が確認できた。その上で、多くの子どもが「自分の家で過ごす」や「親戚(祖父母など)の家で過ごす」と回答しつつ、少ないながらも一定数の子どもがこれらの設問について「あてはまらない」と回答しており、何らかのかたちで自宅や学校以外の場で過ごす様子が見受けられた。昨今の地域の状況を反映するのか、「習い事・部活に通う」との回答が二極化するなかで「友だちの家で過ごす」の割合が低いことから、公共の場の果たす役割の重要性も指摘できる。その点で、アンケートの自由記述や聞き取り調査においても、「保護者のお迎えまで過ごす」ことや「開館時間」の延長や「夜間開放」を希望する回答など、児童館を利用する子どもにとって「実質的な居場所」として機能していることが伺え、その充実が求められている。このことは、「児童館ガイドライン」の「第1章 総則」に記される児童館の特性における「①拠点性」に示されるように、児童館を必要とする子どもにとって安心して過ごすことのできる居場所としての役割が求められることが確認できる。

なお、「学童保育(学童クラブ)に通う」の設問については、今回の調査はあくまで児童館を利用している子どもを対象としているため、児童館に設置されている放課後児童クラブの利用の有無や児童館以外で設置されている放課後児童クラブを利用しながら土日などに併用する子どもの実態などが十分に反映されておらず、全体的な状況を反映していない。「子どもの貧困」について全国的にも注目される沖縄県の状況下<sup>1)</sup>において、放課後児童クラブの利用料の平均金額も高い<sup>2)</sup>状況であり、経済的な理由から放課後児童クラブの利用につながらない家庭も多い。このことから、一定数のニーズとして放課後の子どもの居場所として児童館の果たす役割が注目される。反面、児童館が設置されていない市町村や、通える範囲に児童館が設置されていない地域の子どものための放課後の居場所がどのような状況であるのか、今後、検証していくことが課題となる。

### 3) 多様な機能の可能性

児童館や児童館職員に対して「学校とは異なる役割」を子どもが求めている回答などは、下校後に利用する子どもはもちろんのこと、不登校や中卒、高校中退など、学校に居場所を求めづらい子どもにとっては貴重な居場所となっていることも確認された。聞き取り調査にて拾うことのできた子どもの声からは、単に空間としての居場所だけでなく、「安心できる」「認められる経験」を併せ持つことで有意義な役割が発揮できることも確認でき、「第三の居場所」としての機能が求められると捉えることもできる。ある児童館の実践では、近隣の学校や警察と密に連携を図り、児童館として受容的なかかわりを保障しながら他機関にはない役割を担うことで連携を果たす事例もあった。他に、地域住民とも交流しながら地域の畑で子どもたちの栽培体験活動を実施し、収穫物を地域交流イベントにて販売する事例、さらには、公民館などを利用して児童館のない地域に出張して遊びの提供を企画する「出前児童館」の取り組みなどもなされている。このように、体験を通して地域とのつながりのなかで子どもたちが過ごすことのできる「③地域性」の特性を活かした実践も繰り返されている。

別の児童館の実践では「放課後の履歴書」として、児童館での子どもの活動実績をまとめて冊子にする取り組みが行われていた。学校以外での取り組みを客観的に評価する手立てとして有効な活動として評価したい。

このような配慮は対人的な面だけでなく、活動を通して児童館で安心して過ごすための遊びや居場所としての環境整備としての配慮にもつながるものである。児童館には、日常的な場面での環境整備はもちろんのこと、行事やイベントなど、児童館の場や関係性を活用した企画力が問われ、その充実が求められている。特に、昨今の新型コロナウイルス感染防止の情勢においては利用人数の制限や休館などの措置をとらざるを得ない場面もあるなかで、オンラインでの実践や遊びのキットを準備・配布して自宅での遊びを保障する「おうち児童館」など、工夫した実践がなされている。ここに記した例は一部であるが、児童館の特性として先に記した「①拠点性」「③地域性」とともに、個別の子どもニーズに応じて適宜必要な支援を展開することができる「②多機能性」も児童館の大きな特徴の1つであり、有効に活かされることが求められる。

#### 4) 子どもの本音を認め、活かす実践

今回の調査では、児童館職員と具体的な遊びを通してかかわりを持ちつつも、そこには子どもにとって信頼できる個別のかかわりや環境が整えられること、安心して過ごすことなどを求めている子どもたちの声を拾い上げることができた。自由来館が基本である児童館には、子どもたちの参加の背景にある子ども自身の意思や主体性をいかに育むかが問われており、そこに、学校とは異なる関係性が特徴的な児童館職員の対等性が大きく寄与するものと考えられる。何気なく日常を過ごす子どもたちの内なる声を拾い上げるためにも、些細な兆しを敏感に察知し、子どもの思いを返す取り組みとして、アドボカシー（代弁）機能の重要性を再確認することができる。さらには、各児童館の背景から挙げられる子どもの意見が日々の実践、さらには事業計画などにも反映することができるが良い。

児童の権利条約第 31 条には「休息及び余暇の権利・遊び及びレクリエーションを行う権利」が保障されると明記されている。

##### 児童の権利に関する条約

##### 第 31 条 (休息及び余暇の権利・遊び及びレクリエーションを行う権利)

- 1 締約国は、休息及び余暇についての児童の権利並びに児童がその年齢に適した遊び及びレクリエーションの活動を行い並びに文化的な生活及び芸術に自由に参加する権利を認める。
2. 締約国は、児童が文化的及び芸術的な生活に十分に参加する権利を尊重しかつ促進するものとし、文化的及び芸術的な活動並びにレクリエーション及び余暇の活動のための適当かつ平等な機会の提供を奨励する。

児童館は「遊びを通して」支援するものと一般的に捉えられることが多く、楽しく有意義な遊びの環境を保障することについてはよく取り上げられるものである。ただ、それと同時に、「余暇」として「休息」できるための環境も保障されるべきことも併せて重要であり、「楽しい」だけでなく「安心できる」かかわりや環境の保障も改めて捉え直す必要もある。今回の調査結果においても、「ゴロゴロできる場所」「ボーッとできる」「何もしなくても良い」といった記述も見受けられた。また、「(児童館職員に)話を聞いてもらえる」という、受容的なかかわりも改めて重要であり、静と動のいずれのニーズにも応えられること、それが特別な配慮を必要とする子どもたちのための環境としてだけでなく、すべての子どもにとって安心できる環境を保障する視点が改めて求められる。

## おわりに

今回のアンケートや聞き取り調査を通して振り返ると、児童館に対する希望や要望をいろいろと挙げるなかで、意外にも「今のままで良い」と現状に対する満足感を表す回答も目立っていた。また、児童館で過ごす楽しさに関する設問においても肯定的で多様な回答を得ることができ、回答全体を通して児童館や児童館職員に対する子どもたちの安心感や満足感が伝えられていた。

多忙な大人社会において、子どもたちを巻き込む企業活動やメディア社会、インターネット環境など、子どもたちの過ごす空間・時間・仲間は常に変化のなかで過ごしている。今回のアンケートの「希望・要望」で Wifi の設置やスマホの持ち込みなどを求める声も目立つなか、直接体験を重視しつつも、学校教育にICTが導入される昨今の状況からはどのように折り合いをつけるのか、避けて通れない課題である。それぞれの児童館が蓄積してきた実績をもとに、今の時代の子どもにとって必要な遊びや体験・課題等を精査し、地域の特色を活かした事業展開が望ましい。子どもたちから児童館への想いや期待があふれていることが実感できたことから、子どもの声にしっかりと寄り添い、子どもの意見が尊重され、最善の利益を優先した事業計画を立てること、それに基づいて児童館の運営に反映していくことなどが期待される。

また、今回の聞き取り調査等を通して児童館の現場を訪問するなかでは、子どもたちとともに多くの児童館職員と交流することができた。そこでは、児童館の役割や機能を踏まえて地域とつながり、関係機関と連携し、コーディネートする高いスキルを持ちつつ、子どもたちの目線で寄り添って真摯に向き合い、遊びや安心につながる環境への配慮に取り組もうとする姿勢を実感することができた。養成校教員の立場として学生に対する人材育成の観点からは、遊びワークを積極的に取り入れて子どもたちとかかわるスキルを身につけるとともに、学生たちが子どもたちや地域にとって児童館が果たす役割を認識することが求められる。それを学生に伝える上では、子どもたちと交流する機会を確保しつつ、児童館の現場で活躍する優れた実践者の経験や実践に触れられる機会を設けることが望ましい。新型コロナウイルス感染防止が求められる状況において、可能なことから工夫して取り組めると良い。

今後も子どもたちが健やかに育つ居場所として、地域における社会資源として児童館の役割は重要となる。新たに児童館が設置される地域が必ずしも増えるとは言いがたい状況においては、出張による取り組みや各地域の放課後児童クラブなどとの連携など、地域の拠点としての役割を発揮することで、児童館の存在意義を改めて捉えることもできる。そのためにも、児童館職員の役割は児童館内に留まらず、広く地域の子どもを支援するコミュニティアドバイザーのような役割も期待できる。僻地や離島など、現実的に児童館を設置することが困難な地域も想定すると、このように地域の拠点として児童館の役割を位置づけることは今後重要になると考えられる。

県内の児童館からアンケート及び聞き取り調査を行うことで、コロナ禍で過ごす子どもの姿や児童館としての苦労や工夫した取り組みなどに直接触れる良い機会となった。子どもたちの声からは仲間や児童館職員とのかかわりを通じた満足感を多く感じる体験となった。また、遊びや体験活動、なくてはならない居場所としての役割についても再確認できた。子どもたちの放課後の居場所として、子どもらしい自由で豊かな時間を保障するため、コロナ禍で制限されたなかでも安心して向き合ってくれる児童館職員の存在の大きさを改めて感じ、児童館が成長していく頼もしさを感じた。今回、このような機会が頂けたことに深く感謝申し上げます。

## 注釈

1) 2015年11月に県が実施した調査における沖縄県の子どもの貧困率は29.9%で、全国の13.9%と比較し約2倍となっている。また、母子世帯など子どもがいる大人が1人の世帯の貧困率は58.9%となっている。

2) 平成29年度の沖縄県の調査によると、全国においては、放課後児童クラブの利用料が8,000円以上の割合は27.3%であるのに対し、沖縄県は31.1%であった。おやつ代等の実費負担金を含むと、その割合は更に大きく、84.5%となった。全国では6,000円未満の割合が50.2%であるのに対し、沖縄県では39.8%と、半数以下に留まっている。これは、放課後児童クラブの設置・運営主体として公的施設が活用される割合が高くないことも影響している。なお、民立民営で実施されている割合（平成29年度現在）は、全国平均が19.3%であるのに対し、沖縄県では91.1%となっている。

## 参考文献

- ・堀正嗣著『子どもアドボケイト養成講座 ～子どもの声を聴き 権利を守るために』明石書店 2020年10月15日
- ・『平成29年度沖縄県放課後児童クラブ実施内容等調査結果報告書(ダイジェスト版)』沖縄県子ども生活福祉部 2017年
- ・『沖縄県子どもの貧困対策計画【改定計画】』沖縄県 2019年3月